

異文化交流の狭間でみつけた発見

—ポーランド・ヤギェロン大学での授業を通して—

園山 千里

1、はじめに

ポーランドの大学に赴任してから10年が経過しようとしている。先日、海外の大学での出来事をメインにして小文を書く機会があったのだが、自分の文章が「＜越境者＞として働く」というテーマに組み込まれていることを知った。世間から見ると私は「越境者」として捉えられているのかと、若干の戸惑いを感じた。確かに「国境」を何度も越えて、日本とポーランドとを行き来する日々が何年も続いている。専門分野は日本古典文学で、特に平安時代の物語や和歌を研究対象としているため、長期休暇の度に帰国して資料収集をおこない、ポーランドでの授業の合間に論文を執筆するという生活である。あくまでも滞在中の論文執筆は願望であって、もちろん予定通りに事は進まない。自らの専門とは、言語も文化も異なる国で、日本文学を発信するとはどういうことか。高校まで日本の国語教育を受けてきた人文系の学生ではなく、その多くが大学から日本語の習得を始める教育環境で、研究・教育に携わるとはどういうことなのか。ポーランドでの現在について、今思うことを書き留めておきたい。なお、授業の成果として、ポーランド文学の日本語翻訳もほんの一部であるが載せた。

2、クラクフでの日文学研究の今

所属しているポーランド・クラクフにあるヤギェロン大学はボローニャ宣言に則った学士課程1～3年、修士課程1・2年の学修構造である。ここ数年の顕著な傾向としては、学士課程を卒業後、同様の専門課程には進学せずに、就職するという学生が出てきたことである。なかには経済や情報などの他分野で修士号を取得した後、あらためて日本学科に入学して学士課程のみで卒業するという学生もいる。同じ専門内で学士から修士へ進学するという流れが少しずつ変化しつつある。

しかしながら、学士課程の3年間では基礎的な言語習得にとどまり、留学の機会はいずれにも少ない¹。日本への長期・短期留学を実現するのは、修士課程在学中の学生がほとんどである。修士課程まで進学すると、ほぼ全員の学生が留学の機会を得ることができる。そのようなことを考えると、学士課程の3年間で卒業してしまうのは中途半端な気が

するのだが、日本学の専門知識は必要なく、日本語がある程度できればよい、という考えなのだろうか。驚くことに、留学を希望しない学生も最近になってみられるようになった。日本への観光旅行や企業へのインターンシップで満足であるというのである。インターネットの普及で、情報がどこにいてもみられる世の中、関心さえあれば日本語や日本文化への接触も、ネット上でたやすく得られるようになっているのが現状である。

私は主に修士課程の科目である「日本古典文学演習」、「日本古典文学史」、「近現代文学演習」、「論文読解」、「修論ゼミ」などを担当している。日本語教師ではないため、日本語の文法や構文、会話を担当するという科目はないが、日本語で授業はおこなっているのので、学生にとっては専門科目を日本語で学べる授業、という認識かもしれない。日本の大学でもあえて英語で講義をする、という科目があるが、それと逆のパターンである。

「日本古典文学演習（修士1年対象）」では古典文学を読むための基礎知識を得ることを目標に、文語の学習から始め、上代から近世までの文学作品を一年間かけて親しむ内容となっている。『万葉集』、『日本書紀』、『日本霊異記』、『竹取物語』、『大和物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『成尋阿闍梨母集』、『宇治拾遺物語』、『徒然草』、『雨月物語』、『金々先生栄花夢』などの、ほんの一部分であるが、少しでも多くの作品を読む機会になるように努めている。「日本古典文学史（学士3年対象）」は古典文学にはどのような作品があるか、その特徴を大まかに知ることが重要であると考えているため、作品内容については紹介程度のみで、古典文学史の流れをおさえることができればよいと思っている。学士3年向けの授業であり、毎年担当していない。

「近現代文学演習（修士2年対象）」では近代から現代までの数十本以上の短篇小説を読み、発表者が作家や作品について紹介、その後ディスカッションをしている。今まで夏目漱石、芥川龍之介、川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫、中島敦、堀辰雄、坂口安吾、遠藤周作、大江健三郎、星新一、小川洋子、村上春樹、川上弘美、山田詠美、よしもとばなな、などの短編小説を扱った。基本的には私のほうで課題となる小説を推奨するが、学生が読みたいと希望する小説も積極的に取り入れている。学生のなかには翻訳者を希望とする者も多くいて、授業で扱った作品を将来翻訳したいという学生が毎年現れる。

「論文読解（修士2年対象）」は、修士論文提出を目前に控える学年を対象に、日本語で書かれたさまざまな学術論文を読むことを目的としている。課題論文について毎回担当者が論文要旨と考察のレジュメを作成して報告。担当者報告後には内容読解の確認、意見交換をおこなう。そのため授業参加前に、全員が課題論文を熟読してくることが必須となる。課題論文の分野としては、日本の文学・文化・社会・歴史・哲学・思想・美術など多岐にわたる。最終学年である修士2年の学生にとっては、毎週論文や小説を精読しないといけないため、かなりハードな一年ではある。しかし、確実に日本語の読解力・文章力・表現力はつく。それぞれが身をもって学力の変化を感じられることもあり、出席率もよ

く、学期末授業では達成感を得られた清々しい顔をみられることが嬉しい。

3、授業成果の報告～「修論ゼミ」での翻訳の試み～

今年の半期セメスター（2019年2月～6月、全15回授業）では「修論ゼミ」を担当した。対象は「文学」を専門とする修士1・2年の学生である。言語専門のゼミもまた別に存在する。「修論ゼミ」という名が付いてはいるが、実質、自分が担当する学生への論文指導は個別対応のため、言ってみれば文学を扱えばなんでもよい自由な授業科目となっている。当初の目的では文学理論や漢文訓読の学習に時間を充てようと予定していたのだが、ポーランド語の文学作品を日本語に翻訳してみたい、という要望が学生からあった。彼らは学士課程在学時から、日本語の文章をポーランド語に翻訳する授業は受けているので、それなりの翻訳経験はあるのだが、ポーランド語から日本語へ翻訳することはしていない。理由は簡単なことで、ポーランド人の教員にとって日本語からポーランド語への翻訳指導はしやすいが、ポーランド語から日本語への翻訳はネイティブスピーカーでないため、積極的にやりたがらないからである。しかし、学生の多くが将来の職業として翻訳者や通訳者を目指すなか、本来は両方の翻訳ができるというのが理想であろう。そんなこともあり、ポーランド語専門ではないのにもかかわらず、何とかやってみましょう、ということになった。非常におこがましく、無謀な行為であることは十分承知の上での挑戦である。

まずは準備段階として日常生活にみられる文章を題材に翻訳してみることにした。自分たちの大学のパンフレット、カフェでもらった菓、クラクフの伝説が書かれた本などである。小さな菓は Zakładka Super Babki（スーパー・ギャルの菓）というもので、パートナーから精神的・肉体的に虐待を受けている女性たちへの助言が書かれたものである。一人で悩まず勇気を持って救いの声をあげよう、と地方自治体や精神科、niebieska linia（全国一斉家庭内暴力・虐待防止ホットライン）、最終的には警察に電話するように提案してある。見た目は可愛い菓なので私が何気なくもらってきたのだが、中味は深刻な内容で現在のポーランド社会を考えるきっかけにもなった。

伝説はポーランドで育った子どもなら誰でも知っている Smok Wawelski（ヴァヴェル城のドラゴン）、Wanda, co nie chciała Niemca（ドイツ人と結婚したくなかったヴァンダ）である。学生は幼少期からの馴染みのある内容なので簡単だと思っていたようだが、いざ日本語に翻訳するとなると、意外と難しく時間がかかることがわかった。すでに知っていると思っていた言葉でも、あらためて辞書を引くと微妙なニュアンスの違いがあることを知ったり、文章の組み立て方に悩んだり、一語一語を丁寧にみつめ、確実な日本語を作成していった。

少し翻訳になれた後は、文学作品の翻訳に挑戦してみることにした。まずはどのよう

な作品を訳したいか、実際に翻訳してみたい作品を持参して、自分にとってその作品がいかに好きであるとか、ポーランドで有名なので日本にも紹介したいとか、それぞれ翻訳をしたい理由を述べて、候補をあげた。

学生があげてきた作家には、フランスの文学作品をポーランド語に訳したタデウシュ・ジェレンスキ（1874 年生まれ）、怪奇物が好きな学生はロマン・ヤポルスキ（1883 年生まれ）やステファン・グラビンスキ（1887 年生まれ）、ヤロスワフ・イヴァシュキエヴィッチ（1894 年生まれ）の小説や戯曲、そして現在活躍中のオルガ・トカルチュク²（1962 年生まれ）、アンナ・ブジェジンスカ（1971 年生まれ）、ユリア・フィエドルチュク（1975 年）などがいた。

話し合いの結果、マルチン・シウエトリツキとスワヴォミル・ムロージェク二人の作品を翻訳することにした。マルチン・シウエトリツキは 1961 年のルブリン生まれ。ヤギェロン大学でポーランド文学を学び、1992 年から多くの詩を発表するだけでなく、ジャーナリストやボーカルとしても活躍している。シウエトリツキの『Drobna zmiana』はポーランド語原文をみても一見、散文のようであり、詩という印象がしない。物語性の強い文章である。スワヴォミル・ムロージェクは 1930 年生まれ。当時のポーランドの社会情勢を、散文や漫画を通じて風刺するスタイルで、日本でもすでにいくつかの翻訳が発表されている³。

以下、二点の翻訳を載せようと予定していたが、シウエトリツキの二篇だけを載せる⁴。なお、すべての文責は園山にある。学生とは翻訳作業をしながらもっと解釈や感想について話し合いたかったのだが、時間不足であった。あきらかに授業計画に無理があったので、次年度の反省に生かしたい。

4、マルチン・シウエトリツキの詩

『Drobna zmiana（ささいな変化）』（a5 出版社、2016 年、クラクフ）に収められた「A kiedy」、「A kiedy 2」の二篇⁵。

あるとき

最後に見かけたとき、彼女は冬の夜道に礫にされたまま立っていた。さらに複数の礫が可能に思われた。しかし、彼女は十字架からおりた。髪を染めた。僕が出た場所に上手く入ってくる。彼女の恋人がお酒を断った。彼女の世界に僕はもういない。

あるとき 2

最後に見かけたとき、彼女は別人のように大きな黒縁のサングラスをかけて、ホームに立っていた。僕は車窓の内側にいて、出発まであと数分。彼女とのおしゃべりはもうできない。彼女の連絡先は途絶えた。調べようとする、インターネットは調子が悪くなる。彼女はアジアのどこかに引っ越した。もしくはそれは嘘かもしれない。受け取るのは空っぽの吹き出しだ。

5、スワヴォミル・ムロージェクの短編小説「Sąd ostateczny（最後の審判）」

「Sąd ostateczny」の初出は、1984年3月『KULTURA』⁶である。その後、Tadeusz Nyczek 編『Małe Prozy（小さな散文）』（Oficyna Literacka 出版社、1990年、クラクフ）に、ムロージェクのほかの短編と一緒に、「Sąd ostateczny」も収められた。『Małe Prozy』には月刊誌である『KULTURA』以外にも、クラクフの『Tygodnik Powszechny』とロンドンの『Plus』に掲載されたムロージェクの短編（1982年から1989年に発表されたもの）をポーランド語で読むことができる。文章の合間にはムロージェクが描いた挿絵もみられる。授業ではTadeusz Nyczek 編『Małe Prozy』掲載の「Sąd ostateczny」を訳してみた⁷。Oficyna Literacka 出版社は2004年に廃業。その後、スイスのNoir sur Blanc Oficyna Literacka という会社が名前を引き継いでいるが、『Małe Prozy』の再版はしていない。現在、ムロージェクの著作権はスイスのチューリッヒにあるDiogenes 出版社にある。今回の日本語掲載について許可を求めるメールを何度か送ったが、数カ月以上経過しても最終的な決定を伝える連絡が何もないため、残念ながら「Sąd ostateczny」の翻訳を今回載せるのは諦めることにした。天国が社会主義国に変化しているという内容で、場面展開も興味深く、面白いものなので、日本語で紹介したかったのだが、いつかどこかで翻訳の機会があればと思っている。

6、おわりに

授業では、ときに日本とヨーロッパとの比較について議論となる。慣習や文化の相違だけでなく、文学の観点からも話し合いが持てるようになるのが面白く、徐々にポーランド文学の魅力に取りつかれるようになった。特に詩が好きである。ヴィスワヴァ・シンボルスカの詩集との出会いが始まりで、チェスワフ・ミウォシュ、ズビグニエフ・ヘルベルトなどの20世紀を代表する詩人たちの作品にも触れるようになった⁸。時代も国も社会情勢も異なるので比較にはならないと思うが、日本の和歌をよんでいる時には抱かない緊張感

がポーランドの詩にはある。その違いが興味深く、ポーランドの本屋さんにも通うようになった。私にとっての一番は、やはり日本の古典文学だけれども、世界には自分がまだ知らない面白い文学作品がたくさんあるという、贅沢な発見を実感できる日々である。異なる世界や社会に身を置くことは、境界にとらわれることのない自由な領域を垣間見るチャンスである。もちろん異国での生活は苦勞も多いが、それと引き換えに、一つの国だけにいたら感じるができない、とても貴重な日々を過ごしているのかもしれない。そのように考えると「越境者」という立場も悪くはない。

ポーランド人からよく聞かれる質問として「ポーランドは好きか」「ポーランドのどのようなところが好きか」というのがある。しかもその問いに込められているのは、単なる好奇心以外に、ヨーロッパにはほかにもいろいろな国があるのになぜ（わざわざ）ポーランドを選んだのか、という自嘲めいた要素が込められているように感じる。正直、どのように答えれば相手の望む返答になるのか、と憶測までしてしまう質問ではある。ポーランドは好きではあるが、生まれ育った日本と同じように悪い面もみえるようになってきた。一概に「ポーランド大好き」とは答えられないのが本音ではある。それは私にとってポーランドは遠くにあって憧れの対象であり続けるのではなく、かなり身近な存在になってきている証拠なのだろう。冷静に相手を見つめる心の余裕も出てきた⁹。そのような状況のなかで、常に意識していることは、海外の大学で日本文学を発信する立場であるということだ。日本学科に所属しているからといって「伝える」「教える」の一方通行になってはいけないと常に自戒している。交流は相互の国への尊重があってこそ成り立つものであり、相手の国の言葉や文化、そして文学を知ることが、翻って日本文学を世界の文学という大きな枠組みのなかで捉え直すことにも繋がる。いつまでポーランドにいるかはわからないが、ポーランドとの縁は一生ものであり、ポーランドについて知りたいという欲求はずっと保ち続けたいと望んでいる。

注

1. 毎年、一学年 20 名ほどの学生のうち、学士課程在学中に国費外国人留学生制度を利用して留学するのは、本学では 3～5 人ほどである。
2. 2019 年 12 月に 2018 年のノーベル文学賞を受賞。学生が持参した本はオルガ・トカルチュクの『Szafa』だったと記憶している。
3. 長谷見一雄、吉上昭三、沼野充義、西成彦訳『象』（国書刊行会、1991 年）、芝田文乃訳『所長 ムロージェク 短篇集』（未知谷、2001 年）、芝田文乃訳『鰐の涙 ムロージェク 短篇集』（未知谷、2001 年）、沼野充義訳・解

- 説「スワヴォミル・ムロージェク 原子カムラの結婚式 2011 バージョン」(『すばる』2011 年 12 月)。
4. 翻訳に関しては「Seminarium japonistyczne magisterskie (修論ゼミ)」(科目コード WF.IO-M-JAP-2-14B/1-14B)に参加した学生、特に修士 2 年のイザベラ・ストショップさん、キング・ヴォジニャックさん、パウリーナ・トムジンスカさん、マグダレーナ・バルデンガさん、ユスティーナ・ハラシミュックさんに多くの協力を得た。
 5. Wydawnictwo a5 に翻訳許可のお願いをしたところ、Marcin Świetlicki 本人に確認を入れてくれ、すぐに快い返事を得た。感謝申し上げます。今後はマルチン・シフェトリツキのほかの作品にも注目してみたいと考えている。
 6. 『KULTURA』Nr 3/438, Instytut literacki, 1984. バリでの出版。53 ～ 59 ページに「Sąd ostateczny」がみられる。
 7. 「Sąd ostateczny」は 69 ～ 73 ページに掲載。
 8. ヴィスワヴァ・シンボルスカの詩集との出会いについては、拙稿「海外で日本文学を伝える—ヴィスワヴァ・シンボルスカの詩集との出会いから—」(『日本文学』日本文学協会第 66 巻第 6 号、2017 年)に述べた。
 9. 沼野充義『W 文学の世紀へ——境界を越える日本語文学』(五柳書院、2001 年)「あなたは日本が好きですか？」に、沼野氏がスロヴァキアの現地テレビ局に「日本人にとってスラヴの言語や文学のどこが魅力なのでしょう(181・182 ページ)」と質問され、その回答の仕方に悩んだ経緯から、自分が長年付き合っている国に対して「好きでも嫌いでもない」・「好きでもあるし、嫌いでもある」(183 ページ)という「いい加減さがあるからこそ、世の中は成り立っているのではないか」(183 ページ)という文章がある。私自身はポーランドのいろいろを熟知しているわけではないので、沼野氏の感覚と同様だと言うのは厚かましい限りだが、大変共感を覚えた内容である。